

中世語の仮定条件表現について

泉 桂 子

は じ め に

古代語から近代語への変遷という場合、仮定条件表現（順接）が「未然形＋ば」から「已然形（仮定形）＋ば」へと変わったということがしばしば指摘される。そして、「已然形＋ば」の恒常条件を示す用法が仮定条件表現につながるものであったことが、その変遷の主な原因と考えられている。これに関して詳しい論を述べたものとして、阪倉篤義氏「条件表現の変遷」^(注1)、山口堯二氏「一般条件法の性格」^(注2)がある。

本稿においては、中世初期の『無名抄』『方丈記』『発心集』を資料として、その中にみられる仮定条件表現について調べた結果をまとめてみたいと思う。^(注3)

仮定条件表現について考えるにあたって、直接に調査の対象とするのは、主に接続助詞であるが、一般にいう接続助詞以外にも、仮定条件の表現形式とみられるものがある。ここでは、そういう接続助詞的な機能をもつ語をも含めて考えることにする。3資料にみられる仮定条件の表現形式として、次のようなものが挙げられる。

順接——「未然形＋ば」（形容詞及び打消の助動詞「ず」の場合は「連用形＋は」）、「已然形＋ば」、「ては」、「とき（は）」、「には」

逆接——「とも」、「ど・ども」、「とて」・「とても」・「ても」

私は、中世語における、仮定と確定という2つの条件表現の交渉について考えるために、条件表現について、試みとして次のような分類を行なった。

仮定と確定のそれぞれについて順接と逆接の場合があるが、それらのおのおのについて個別的な事柄を述べる場合と、個性性を越えた一般的な事柄を述べる場合とを区別する。^(注4)（本稿においては仮に、個別的仮定、一般的仮定、個別的確定、一般的確定と呼ぶことにする。）一般的な真理や習慣を述べるものは、普通、「已然形＋ば」および「ど・ども」の恒常条件を示す用法として扱われることが多いが、ここでは、一般的な真理を述べるものは一般的仮定、習慣を述べるものは一般的確定と考える。確定条件表現のうち、

個別的な事柄を述べる場合（個別的確定）については、一応、仮定条件表現と区別して、本稿では考察の対象としない。

個別的仮定については、山口堯二氏の分類を参考にして次のように分類することにした。
(注5)

- ① 表現者が、条件が成立しないと判断している場合
- ② 表現者が、条件が成立するか否か判断できないでいる場合
- ③ 表現者が、条件が成立すると判断している場合

以下、個別的仮定（A①、A②、A③）、一般的仮定（B）、一般的確定（C）という分類にそって、用例を挙げながら各表現形式についてまとめることにする。

1. 順接の場合

1-1 「未然形+ば」（「くは」「ずは」）

- A① 彼の後撰の哥、この比ならば撰集に入るべくもあらず。（無名抄 98）
(注6)
「あはれ、我が身男ならましかば、いかなる様にてても、御あたりにこそは仕うまつらまし」と、かひなき女の身を恨みてむなく過ぎ侍りしかど……（発心集 254）

これは、一般に反実仮想といわれる場合である。後の方の例で言えば、「我が身男なら」は事実でないことが明らかであり、話手は「我が身男ならましかば」という条件が成立しないことを判断した上で表現しているのである。

- A② 若、心になはぬ事あらば、やすく外へ移さむがためなり。
(方丈記 36)

我を深く思はば、我が形見と思ひて、いとほしくせよ。（発 259）

これは、条件が成立する可能性とともに、一方では成立しない可能性をも意識している場合である。未来において実現する可能性をもつ事柄だけでなく、現在の事柄であっても事実であるか否か判断できない事柄についても述べるものである。上に1例ずつ例を示した。

- A③ されども頭昭等が聞き及ばぬ名所あらじやと思ひて、やゝもせば難じつべく覚え侍しかど、誰とは知らねども哥様の宜しく見えしかば、所を嫌はずさ申して侍しなり。
(無 44)

その所のさまをいはば、南に懸樋あり。 (方 37)

いかゞ奴婢とするとならば、若、なすべき事あれば、すなはちおのが身をつかふ。 (方 42)

法師の云ふやう、「おのれらほどのものは、法師とて、をのこに替はる事なし。何わざなりとも、身にたへむ程の事は仕らむ」と云へば、
「左様ならば、よし」とてとどむ。 (発 50)

さほど思はるる事ならば、承りぬ。 (発 209)

これは、A②が条件が成立する可能性とともに成立しない可能性をも意識している場合であつたのに対して、条件が成立しない可能性を全く意識していない場合である。表現者の意識において、条件の成立、不成立が問題とならない場合である。

上に挙げた例のうち、後の方の2つは、一般に修辭的假定といわれるものである。假定条件として表現されている事柄は、いずれも事実である。

云はば、旅人の一夜の宿を借るがごとし。 (発 330)

進退やすからず、起居につけて、恐れをののくさま、たとへば、雀の鷹の巢に近づけるがごとし。 (方 34)

上の「いはば」や「たとへば」は、結びの「～がごとし」と呼応する形が熟しており、また、「いふ」や「たとふ」が目的語を伴っていない。言い換えれば、目的語を形の上では必要としないということから、副詞として扱うのが適當であると考えるが、語源的には假定条件表現と直接結びつくものである。實際、このA③に属する例には、「言ふ」の未然形に「ば」の付いたものが多い。そういう言い方が慣用句的に用いられてやがて副詞として熟したものになっていったのであろう。副詞として用いられる場合には、もはや表現者に假定するという意識は殆どないと思われる。

ここで、A①、A②、A③を比較すると、假定するという意識、言い換えれば、「仮に～としたら」という気持ちは、A①において最も強く、A③において最も弱いといえるであろう。

B 若し、人、心を起して菩提を求めんと思はば、手の指・足の指をとぼして、仏陀に供養せよ。 (発 147)

人界に生るとならば、一の人こそいみじかりけれ。 (発 230)

A①、A②、A③は、すべて、個々の具体的な事柄を述べるものであつ

たのに対して、上の例は、個別性を越えて普遍性をもつ一般的な事柄を述べるものである。

個別的、具体的な複数の事柄に相通じるものを認めた場合には、それらをまとめて一般的な事柄として扱うことが可能になるのであるから、個別的仮定といい、一般的仮定といっても、対立的ではなく、連続的であるといえよう。ただ、仮定するという意識について言えば、一般的仮定においては、具体性に欠ける分だけ、個別的仮定に比べてその意識が弱いといえるのではなからうか。

I - 2 「已然形 + ば」

A①の反実仮想の例はみられない。

A②に属するとみられるのは次の1例のみである。

「……かくおぼし立ちけん事の、返す返すもあはれにたぐひなく覚えて侍り。且は、こまかに承りて、我が心をも励まし侍らむと思ふなり。深くへだて給へば、いと本意ならず」などと、こまかにうち口説き恨むれば、…… (発 286)

ただ、この「已然形 + ば」は、文脈の上から確定条件表現と解することも可能で、私が使用したテキストでは「私をうとみ遠ざけなさるなら……」という訳が付いているが、築瀬一雄氏は「ひどく分けへだてなさるので……」と訳しておられる。

(注7)
A③ いかんとなれば、其のしるしを見せ奉らんためなり。 (発 116)

しかれど、濁世の習ひ、我が分ならぬ事を願ひ、や。や。も。す。れ。ば。是を誘りて云はく、…… (発 146)

いといとあはれなり。さほどに思ひ立たれたる事なれば、とかく申すに及ばず。 (発 143)

最後の例は修辭的仮定の例である。2番目に挙げた例の「ややもすれば」という表現は、先に「未然形 + ば」のA③の例として挙げた「ややもせば」と同じ使われ方と見られる。

Bに属する例は全部で 71 例あり、「未然形 + ば」の 28 例に比べてかなり多く用いられている。

若、せばき地に居れば、近く炎上ある時、その災を逃る事なし。若、辺地にあれば、往反わづらひ多く。盜賊の難はなはだし。 (方 34)

魚は水に飽かず。魚にあらざれば、その心を知らず。鳥は林をねがふ。

鳥にあらざれば、その心を知らず。 (方 43)

もし、人、心に忘れず極楽を思へば、命終る時、必ず生ず。(発 121)

水を渡る者、手を休めつれば、溺れて死す。火を切る者、力を入れざれば、得る事なし。 (発 330)

いずれも、一般的な事実や真理を述べたものである。「必ず」や「～スル者」という言い方からもそのことはわかる。

私がここで、「已然形+ば」による一般的仮定の例として挙げたようなものは、普通、恒常条件の表現として扱われ、仮定条件の表現とは別に考えられているようである。しかし、「未然形+ば」による一般的仮定の例と比べてみても殆ど違いがないと思われる。むしろ、普通には同じく恒常条件を表すものとして扱われている習慣などを表す場合(本稿でいう一般的確定)と区別できるものとみられる。

3 資料の中の「已然形+ば」による仮定条件表現は、BおよびA③に属するものが殆どである。このように、仮定するという意識が比較的弱いと考えられるBおよびA③に属するものばかりであることは、仮定条件表現(順接)の「未然形+ば」から「已然形+ば」への変遷の初期の段階をうかがわせるものといえよう。

[C] 若、夜しづかなれば、窓の月に故人をしのび、猿のこゑに袖をうるほす。 (方 39)

心、身の苦しみを知れば、苦しむ時は休めつ、まめなれば使ふ。

(方 42)

和哥の会の有様、げにげに敷く優に覚えし事は、次の所にとりて、近くは範兼卿の家の会のやうなる事はなし。(中略)若当座に会あれば、各所々にさし退きつつ案じ合ひたるさまなどまでも、艶にあらまほしきやうに侍しかば、させる事なき哥もことがらに飾られて艶に聞え侍りき。 (無 71)

中比、安房守源親元と云ふ人ありけり。(中略)国を治めける間、…。(中略)もし、犯の者あれば、念仏する者をば選ひて、必ず許す。

(発 322)

此の所に住みそめけるより、奥の院へ入堂する事、毎日にかかず。其の間、雨風霜雪をためらふ事なし。養笠用意する程のかまへだになければ、雨降れば、さながらぬれ、又雪降れば、凍て氷る。(発342)

個別的確定が唯1回きりの特殊な関係を述べるものであるのに対して、これらは、時間を捨象し、具体を離れた表現である。仮定条件表現における、個別的仮定に対する一般的仮定に対応するものである。一般的確定は、時間を捨象し、具体を離れたものである点において一般的仮定に通じる。ただ、既定の事実を述べるという点において仮定と区別される。

上に挙げた「已然形+ば」のうち3例が「もし」に呼応して用いられている点に注意したい。現代語においては、一般的確定の表現は仮定条件の表現形式をもってすると思われるが、その場合、普通「もし」は用いない。この時代には、「もし」が逆接の仮定条件表現にも用いられており、^(注8)「もし」は現代語の「もし」よりもかなり広い用法をもっていたようである。

I-3 「ては」

「ては」は、接続助詞「て」に係助詞「は」の付いたものであり、全体を1つの接続助詞として扱われることはないのであるが、接続助詞的な機能をもっており、ここでは仮定条件の表現形式の1つとして考える。

A② 一日の絶え間だにわりなく覚ゆるを、立ち別れては耐へぬべくもあらねど、いかがはせむ。(発199)

A③ 此の病者に至りては、厭ひきたなむ人のみありて、近付きあつかふ人はあるべからず。(発176)

かく、是程思ひ取られたらんに至りては、留むるに及ばず。さるべきにこそあらめ。(発149)

後の方の例は、修辭的仮定とみられる。

B (鳩の浮巢は)潮満ちては上へ上り、潮の干れば随ひて下るなり。
。(無42)

此の涅槃經を皆悉く聞きたりとも、重罪をつくりては、遁れがたし。
(発308)

先の方の例が、同一文中で「已然形+ば」の形式と対にして用いられている点に注意される。

I-4 「とき(は)」

「連体形+とき(は)」の形で仮定条件を表す。この場合、「とき」という語は、普通に名詞として用いられる際の概念内容を伴ってはならず、「とき(は)」という形で純粹に接続の機能だけをもつ語として使われているとみられる。この形式は、一般的な事柄を述べる場合により多く用いられるが、個別的仮定にも用いられている。

- A② もし限りならん時は、あなかしこ、あなかしこ、妻の方に告げ給ふな。
(発 177)

- A③ 但し、此の事世間のいとなみにならぶる時は、賢こげなれど、よく思ひとくには、天上の楽しみ、なほ終りあり。
(発 238)

- B もし、人の為にも愛著し、自らも心あらん時は、必ず此の相を思ふべし。
(発 181)

哥は作りたてたる風情・巧みはゆゝしけれど、哥品を定むる時さしもなき事もあり。
(無 81)

- C 若、つれづれなる時は、これを反として遊行す。
心、身の苦しみを知れば、苦しむ時は休めつ、まめなれば使ふ。
(方 39)

(方 42)

上の2例はともに、長明が現在の自分の生活について述べている部分である。後の方の例では、「已然形+ば」と共に、同じ用法で用いられている。

I-5 「には」

「には」は、格助詞「に」に係助詞「は」の付いたものであるが、全体で接続助詞的な機能をもつものとみられる。

- A② さて、此の入道殿は、功德を作し給はむには、何れの事か、心に叶はざらむ。善知識を尋ね給はんにも、又、行徳高き人多し。
(注9) (発 107)

- A③ 但し、此の事世間のいとなみにならぶる時は、賢こげなれど、よく思ひとくには、天上の楽しみ、なほ終りあり。
(発 238)

上の「には」は、同一文中の「ときは」と同じ使われ方である点に注意される。

- B 浄土を願はんには、身を全くして念仏の功をかさぬべし。
もし、功德の為に、かく功をつみ、勇猛精進の心をおこさんには、現

身に三昧を得つべし。

(発 365)

- 〔C〕 富める人のおとろへたる様を見るに、ゆたかなる時、衣を厚く着て、
薬を服して壁代をひき、様々身をいたはるには、常に風熱きはひ発り
て、神心やすき事なし。

(発 328)

個別的仮定の場合も一般的仮定の場合も、推量の助動詞「む(ん)」に付いているのが殆どである。それで、これらの「む(ん)」と「に」の間に「時」のような名詞が省略されているとみて、格助詞「に」が推量の助動詞の助けを借りて未来時の表現をしていると考えることも可能である。しかし、一般的仮定の例として挙げた後の方の「には」などは明らかに「もし」と呼応しており、「には」という形式で仮定を表す言い方が熟していると思われる。

表 1. 順接の仮定条件の表現形式の用例数

用法 表現形式	A. 個別的仮定					B.	C.	計
	①	②	③	そのうちの 修飾的仮定	小 計	一般的仮定	一般的確定	
未然形+ば	23 { 0 8 15 }	46(16) { 3(2) 3(1) 40(13) }	12 { 3 3 6 }	4 { 0 1 3 }	81(16) { 6(2) 14(1) 61(13) }	28(5) { 0 5(1) 23(4) }	0	109(21) { 6(2) 19(2) 84(17) }
くは	0	1 { 0 1 0 }	0	0	1 { 0 1 0 }	5(1) { 0 1 4(1) }	0	6(1) { 0 2 4(1) }
ずは	2 { 0 1 1 }	9(5) { 0 1(1) 8(4) }	0	0	11(5) { 0 2(1) 9(4) }	10(2) { 1(1) 0 9(1) }	0	21(7) { 1(1) 2(1) 18(5) }
已然形+ば	0	1 { 0 0 1 }	14 { 1 3 10 }	7 { 1 3 3 }	15 { 1 3 11 }	71(8) { 12(2) 24(1) 35(5) }	34(8) { 8(3) 2(1) 24(4) }	120(16) { 21(5) 29(2) 70(9) }
ては	0	4 { 0 1 3 }	3 { 0 0 3 }	1 { 0 0 1 }	7 { 0 1 6 }	8 { 0 2 6 }	0	15 { 0 3 12 }

とき(は)	0	2(1) 0	1 0	0	3(1) 2(1) 1	5(2) 1(1) 2 2(1)	10(4) 6(2) 0 4(2)	18(7) 7(3) 5(1) 6(3)
には	1 0 1 0	3 0 0 3	1 0 0 1	0	5 0 1 4	3(2) 0 0 3(2)	1 0 0 1	9(2) 0 1 8(2)

注、 ()内の数字は、「もし」を伴うものの内数。

3資料の用例数の合計の下に、上から『方丈記』、『無名抄』、『発心集』の順で、それぞれの資料における用例数を示した。

Ⅱ. 逆 接 の 場 合

古代語の仮定条件表現では、順接の「未然形+ば」に対して、逆接の場合は接続助詞「と」および「とも」が用いられたといわれる。しかし、「と」の使用頻度は極めて低いため、古代語における逆接の仮定条件表現は「とも」が担ったといってもよい。この「とも」は現代語においても用いられることがあるが、一般には「ても」が用いられる。そして、この接続助詞「ても」の発生は中世といわれる。

ここで1つ注意しなければならないのは、上のように言う場合、仮定条件といっても、それは、仮定条件表現を個別的仮定と一般的仮定とに大別したときの前者の方に着目して言っているという点である。古代語における、一般的仮定をも含む仮定条件表現を考える場合には、普通には確定条件表現に用いられるとされる接続助詞「ど・ども」についても見なければならない。

「ど・ども」は、一般的仮定の表現形式としても用いられた。此島正年氏は、「古代語の現然仮定（松下大三郎氏のいわれたもの。ここでいう一般的仮定にあたる）は『ど（も）』によって表された」として、

二人行けど行き過ぎがたき秋山をいかにか君が一人越ゆらむ

(万二、106)

弥陀の誓ぞ贈もしき。十悪五逆の人なれど一度御名をとなふれば来迎引接疑はず。

(梁塵秘抄、二)

等の例を挙げ、「具体的な作用とは無関係に、一般的・抽象的に作用の実現を想定し、それを逆接的に下へ続けるのがこれらの『ど(も)』で、……」と述べておられる。

(注¹⁰)

3 資料においては、古代語の逆接の仮定条件の表現形式「とも」、「ど・ども」に加えて、新しい表現形式「ても」も用いられている。

Ⅱ-1 「とも」

A① われ、今、(仮りの庵を)身の為^ににむすべり。人の為^ににつくらず。

(中略) 縦、ひろくつくれりとも、誰を宿し、誰をか据ゑん。

(方 41)

明らかに事実ではない事柄が条件とされている。「庵」は既につくられてしまっており、「ひろく」はなく狭いのである。

A② たとひよく喰ふとも、二つ三つにや過ぐべき。それほどの物を惜しみて、我が願ひを叶はせぬは、口惜しきわざなり。(発 367)

何わざなりとも、身にたへむ程の事は仕らむ。(発 50)

A③ 中比、奈良に、聖梵入寺・永朝僧都と云ふ二人の智者あり。(中略)
(聖梵は)かかるうたてき心を持ちたる故に、智者と云ふとも、其の験もなし。(発 375)

これは修辭的仮定の例である。

B 道のほとりになほざりに見つれたりとも、金は宝なるべし。(無 81)
いみじき功德をつくるとも、心ととのはずは、かひなかるべし。

(発 349)

Ⅱ-2 「ど・ども」

「ど・ども」は、個別的仮定には用いられないが、一般的仮定には用いられる。

B 歌は秀句を思ひ得たれど、本・末いひ適ふ事の難きなり。(無 63)
若、おのれが身、数ならずして、権門のかたはらに居るものは、深くよろこぶ事あれども、大きにたのしむに能はず。(方 34)

C 此比の人々の会に連なりて見れば、まづ会所のしつらひより初めて、人の装束の打解けたるさま、各が気色有様、乱れがはしき事限りなし。
いみじう十日、廿日かけて題を出したれど、日比は何わざをしけるにか、当座にのみ哥を案じてそぞろに夜を更かし、興をさまし、……
(無 71)

中比、常磐橋大夫守助と云ふ者ありけり。年八十にあまりて、仏法を知らず。齋日といへども精進せず。法師を見れども、貴む心なし。

(発 119)

Ⅱ-3 「とて」・「とても」・「ても」
(注11)

「とて」は、引用の格助詞「と」に接続助詞「て」の付いたもので、引用を示すのに用いられるのが本来で、「て」は順逆に関しないのであるが、逆接の場合に用いられることが多くなって、「とて」自体が逆接の意を帯びるようになったものといわれる。「とて」に係助詞「も」が付いて「とても」^(注12)という形になると一層仮定の意味が明確になる。

「とて」・「とても」のA①の用法もあると思われるが、3資料には用例がみあたらない。

A② 問曰、「今の世の躰をば新しく出来たるやうに思へるは僻事にて侍るか」。答曰、「この難はいはれぬ事なり。たとひ新しく出来たりとても、必ずしもわるかるべからず。……」 (無 84)

A③ 法師の云ふやう、「おのれらほどのものは、法師とて、をのこに替はる事なし。……」 (発 50)

B 多く罪を作れりとて、卑下すべからず。深く心を発して勤め行へば、往生する事、又かくの如し。 (発 132)

C 心、身の苦しみを知れば、苦しむ時は休めつ、まめなれば使ふ。使ふとても、たびたび過ぐさず。もの憂しとても、心を動かす事なし。 (方 42)

上のA③の例のように、「とて」・「とても」は体言に接続することがある。用言に接続する接続助詞と、形態の上では異なるが、機能の面では用言に接続しているものと変わりが無い。「とて」の「と」は引用の「と」であり、「体言+とて」には「用言+とて」と同様に叙述が認められる。上のA③の例の「法師とて」は、「法師(である)といつても」ということである。それで、体言に接続する場合にも「とて」は仮定条件を表現しうるのである。

「ても」は、接続助詞「て」と係助詞「も」の複合による仮定条件表現の形式として、順接の場合の「ては」に対応するものとみられる。3資料にみられる「ても」の中には、A①、A③の例はみあたらない。

A② 「此の殿には、いかなる御嘆きの出で来て侍るにか」と問ふに、「我等しき人は、聞きててもいかがは」と、ことのほかにいらふるを、…
… (発 51)

……はかなくて息絶えにき。今は（この家に）おき奉りてもかひなしとて、此の前の野におき奉りし程に、…… (発 202)

B 又、鶏の子を暖むる様は、誰も見る事ぞかし。（中略）物はまむ為に、おのづから立ち去りても、かれがさめぬ程に、と急ぎ帰り来るは、おぼろけの志とは見えず。 (発 245)

かかれば、わざとも此の身を仏道の為に投げて、不退の身を得んとこそ覚ゆべけれ。（中略）しばしいたはりて何かせん。いかにも、衣食は生得の法なり。天運にまかせててもあり。 (発 328)

C 此の聖梵、学生の方はいみじき聞こえありけれど、人の為腹悪くして、さるべき経論などを人に借りても、殊なる要文ある所をば、切りとり、さりげなく継ぎよせてなむ返しける。 (発 375)

中比、近江の国に乞食しありく翁ありけり。立ちても居ても、見る事聞く事につけて、「まして」とのみ云ひければ、国の者、「ましての翁」とぞ名付けける。 (発 127)

表 2. 逆接の仮定条件の表現形式の用例数

用法 表現形式	A. 個別的仮定					B.	C.	計
	①	②	③	そのうちの 修辭的仮定	小 計	一般的 仮 定	一般的 確 定	
とも	3(2) { 2(1) 0 1(1)	31(10) { 1 7(2) 23(8)	2 { 0 1 1	2 { 0 1 1	36(12) { 3(1) 8(2) 25(9)	35(10) { 1 7(1) 27(9)	0	71(22) { 4(1) 15(3) 52(18)
ど	0	0	0	0	0	18 { 0 13 5	1 { 0 1 0	19 { 0 14 5
ども	0	0	0	0	0	22(2) { 3 4 15(2)	8 { 0 0 8	30(2) { 3 4 23(2)

とて	0	0	6 $\left\{ \begin{array}{l} 0 \\ 3 \\ 3 \end{array} \right.$	6 $\left\{ \begin{array}{l} 0 \\ 3 \\ 3 \end{array} \right.$	6 $\left\{ \begin{array}{l} 0 \\ 3 \\ 3 \end{array} \right.$	2 $\left\{ \begin{array}{l} 0 \\ 1 \\ 1 \end{array} \right.$	0	8 $\left\{ \begin{array}{l} 0 \\ 4 \\ 4 \end{array} \right.$
とても	0	4(2) $\left\{ \begin{array}{l} 0 \\ 0 \\ 4(2) \end{array} \right.$	2 $\left\{ \begin{array}{l} 0 \\ 0 \\ 2 \end{array} \right.$	2 $\left\{ \begin{array}{l} 0 \\ 0 \\ 2 \end{array} \right.$	6(2) $\left\{ \begin{array}{l} 0 \\ 0 \\ 6(2) \end{array} \right.$	3(1) $\left\{ \begin{array}{l} 0 \\ 0 \\ 3(1) \end{array} \right.$	5 $\left\{ \begin{array}{l} 2 \\ 0 \\ 3 \end{array} \right.$	14(3) $\left\{ \begin{array}{l} 2 \\ 0 \\ 12(3) \end{array} \right.$
ても	0	6 $\left\{ \begin{array}{l} 0 \\ 2 \\ 4 \end{array} \right.$	0	0	6 $\left\{ \begin{array}{l} 0 \\ 2 \\ 4 \end{array} \right.$	6 $\left\{ \begin{array}{l} 0 \\ 0 \\ 6 \end{array} \right.$	8 $\left\{ \begin{array}{l} 0 \\ 0 \\ 8 \end{array} \right.$	20 $\left\{ \begin{array}{l} 0 \\ 2 \\ 18 \end{array} \right.$

注、()内の数字は、「たとひ」または「たとへ」を伴うものの内数。

3資料の用例数の合計の下に、上から『方丈記』、『無名抄』

『発心集』の順で、それぞれの資料における用例数を示した。

「とて」「とても」については、体言に付いたものを含む。

Ⅱ. ま と め

表 3. 仮定条件の表現形式の用例数

表現形式 \ 用法		A. 個別的仮定				B. 一般的 仮定	C. 一般的 確定	計
		①	②	③	小 計			
順 接	未然形+ば	2 3	4 6	1 2	8 1	2 8		1 0 9
	已然形+ば	0	1	1 4	1 5	7 1	3 4	1 2 0
逆 接	とも	3	3 1	2	3 6	3 5		7 1
	ど・ども					4 0	9	4 9
	{ とて	0	0	6	6	2	0	8
	{ とても	0	4	2	6	3	5	1 4
	{ ても	0	6	0	6	6	8	2 0

注、数字は3資料の用例数を合わせたものである。

3 資料にみられる主な仮定条件の表現形式の用いられ方をまとめると、表 3 のようになる。これをみると、仮定条件表現と確定条件表現の交渉という現象は、よく指摘される順接の場合に限らず、逆接の場合をも含んで、古代語から近代語への動きとしてとらえられるように思う。

古代語における仮定条件の表現形式であった、順接の「未然形+ば」、逆接の「とも」は、一般的確定の用法をもたない。これに対して、近代語における仮定条件の表現形式となった、順接の「已然形+ば」、逆接の「ても」は、一般的確定の用法ももつ。また、古代語における確定条件の表現形式であった、順接の「已然形+ば」、逆接の「ど・ども」は、一般的仮定の用法をももつ（これは、中世に入ってから新しい現象というわけではない。そのことについては先に触れた）。

古代語において、一般的な事柄が、仮定、確定の別を問わず、個別的確定の表現形式によって表されることが多かったのは、客観的には一般性をもつ事柄を、一般的な事柄としてではなく、個別的な事柄としてとらえていたことによるのではなからうか。一般的な事柄が一般的であるととらえられる背景には、既成の事実の蓄積がなければならない。そこに、客観的には一般性をもつ事柄であっても、それを個別的な確定（＝既定）条件の表現形式をもって表現するということが行われた原因があるのではないか。古代語における「未然形+ば」・「とも」による一般的仮定の表現についても、客観的には一般性をもつ事柄を、既成の個別的な事実に基づくところから、仮定するのも個別の場合として仮定し、そのために個別的仮定の表現形式によって表すということになったのではないかと思われる。一般的仮定が、個別的確定と個別的仮定のどちらの表現形式で表されるかは、表現者が、既成の個別的な事実の蓄積と、仮定される個別の場合とのどちらに目を向けているかによるのではなからうか。

論理よりは情緒の方が重んじられた古代の仮名文などにおいては、論理的に厳密な表現はそれほど必要とされなかったのが、中世以後、論理的思想を表現しうる表現形式が必要とされるようになった。客観的に一般性を認めた事柄を表現する場合には、それにふさわしい表現形式が必要とされるようになった。その結果、逆接の場合には、古代語における個別的仮定の表現形式であった「とも」でも個別的確定の表現形式であった「ど・ども」でもな

い新しい「ても」という形式が生まれ、やがて一般的な事柄を対象とする場合に限らず、広く仮定条件を表現する形式として定着した。

順接の場合は、逆接の場合とは事情が異なって、「未然形+ば」でも「已然形+ば」でもない新しい表現形式が生まれるということが起こらなかった（逆接の「ても」に対応する「ては」という形式になる可能性もあったと思われる）。その原因の1つとして次のようなことが考えられる。逆接の場合、「ど・ども」は個別的確定の表現形式として中世以後も中心的な位置を占めるが、これに対して順接の場合、中世以後新しい個別的確定（そのうちの必然確定）の表現形式がいくつか生まれ（「ほどに」「あひだに」「がゆゑに」^{（注13）}「によって」など）、「已然形+ば」がその中心的な位置を占め続けることにはならなかった。そして、やがては新しい表現形式のほうが順接の確定条件の表現形式として定着することになり（実際に定着したのは、必然確定は「ほどに」などより後に生まれた「から」「ので」、偶然確定は「と」であった）、「已然形+ば」は専ら仮定条件表現に用いられるようになった。

古代語において対象とする事柄を個別的にとらえていたのが、個別性を越えた一般的な事柄としてとらえられるようになっただけならば、近代語においても古代語の仮定条件の表現形式をそのまま用いるということになったかもしれない。そうならなかったのは、古代語の仮定条件の表現形式であった「未然形+ば」・「とも」が一般的確定の用法をもたなかったことによるのではなかろうか。近代語における仮定条件の表現形式は、一般的確定をも表現しうるものでなくてはならなかったのではないか。個別性を越え、時間を捨象した事柄は、既定ではなく仮定の条件表現の形式を用いて表されるようになったものと考えられる。一般的な事柄は、一般的であると判断される背景にある既成の個別的な事実と切り離されると、それらと同様の条件を仮定した場合にも起こると認められた事柄であるという点で仮定に通じる。一般的な事柄のもつ一般性を論理的に明確に表現しようとして、これを仮定条件の表現形式で表すことになったのではあるまいか。

私が扱った3資料が成立した鎌倉時代は、まだ古代に近い時期であるが、古代語から近代語への動きは確かに認められる。順接の場合、一般的仮定は「未然形+ば」よりも「已然形+ば」によって表された例の方がずっと多く、「已然形+ば」は個別的仮定の領域にまで入りこんでいる。しかし、個別的

仮定に用いられるのは、仮定するという意識の比較的弱いとみられる A③の用法にほぼ限られている。逆接の場合は、近代語における仮定条件の表現形式として定着した「ても」の他に「ても」とかかわる「とて」「とても」も合わせて用いられている。そして、「ても」「とても」は、A②の用法にまで入りこんでいる。

しかし、「已然形+ば」の中心的な用法はやはり確定条件表現にあり、逆接の「ても」・「とて」・「とても」はまだ用例が少ない。仮定条件表現の中心的な地位は、まだ「未然形+ば」・「とも」が占めている。

お わ り に

以上、仮定条件の表現形式の用法を、個別的仮定、一般的仮定、一般的確定の3つに大別し、3資料に現れた用例を分類してみた結果をまとめた。しかし、ここで行なった分類自体が1つの試みにすぎず、分類のしかたについても、個々の用例の解釈についても、さらに検討してみる必要があると思われる。

私は、仮定条件の表現形式の用いられる領域が、古代語から近代語への過程の中で、推移したと考えるのであるが、その推移の実態を把握するためには、仮定条件表現について、どの時代のそれにも適用できるような体系的なとらえ方をすることが必要だと思う。本稿の考察は、限られた資料にもとづくものであるので、さらに、時代をひろげて多くの用例を集めて考えてみなければならぬと思っている。

注 1. 『国語学』33集 昭33

注 2. 『愛媛大学法文学部論集』4号 昭48

注 3. テキストとしたのは、

無名抄——日本古典文学体系『歌論集 能楽論集』

方丈記——日本古典文学体系『方丈記 徒然草』

発心集——新潮日本古典集成『方丈記 発心集』

注 4. 山口堯二氏は、「仮定表現の類型と諸相」（『国語学』83集 昭45）において、仮定条件表現を「個別仮定」と「一般仮定」に類別された。

- 注 5. 「仮定表現の類型と諸相」
- 注 6. 数字はテキストのページを示す。
- 注 7. 『発心集』角川文庫
- 注 8. 「もし、うとき事になるとも、かやうに縁を結ぶもさるべき事なり。」
(発 82) など。
- 注 9. この「にも」については、「には」と同様に考えた。「には」が2度
続くために2番目が「にも」という形になったものとみられる。
- 注 10. 『国語助詞の研究－助詞史の素描－』 昭 41 桜楓社
- 注 11. 塚原鉄雄氏は、接続助詞「ても」の成立について次のように説明され
た。「接続助詞『て』に、係助詞『も』が複合して成立した。中世の
発生で、『とて』『とても』『ても』が共存して、仮定条件の逆態接
続を表現した。」(松村明編『古典語助詞助動詞詳説』 昭 44 学
現代語燈社)
- 注 12. 此島正年『国語助詞の研究－助詞史の素描－』
- 注 13. 松下大三郎氏は、順接の確定条件を、必然確定と偶然確定とに分けら
れた。前者は、前件と後半との関係が必然的である場合であり、後者
は、前件と後件との間に必然性が認められず、両者の関係が偶然的で
ある場合である。(『改撰標準日本文法』 昭 5 中文館書店)

(お茶の水女子大学大学院生)